

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

アリゾナ州の居留地

アリゾナ州のナバホ族の居留地に行ってきた。映画『駅馬車』や『ホレストガンブ』などで馴染みのモニユメントバレーの朝日が綺麗な場所だ。西部劇ファンの男性ならばジョン・ウェインになったつもりで、腰にピストルを付けて馬に乗ってみたいところだろう。

日頃、家をごうつするかばかりを考えている私は、どこへ行っても家を探すのだが、今回は余りに大自然をバックにした土地で、ここに日々の生活があるのか分からぬ。車を走らせてもなかなか行き交う車もない道で10分おきぐらいにボツンと見える家があるのだが、そこに暮らしているのだろうか？ もともと広い土地に平屋建ての住宅が多いアメリカだが、ここは広大な敷地での平屋なので、家がどこにあるのか見落としてしまいそう。土地の所有権は認められているものの、売買は出来ないのが居留地とか。強制的に集められた居留地に来て七代目となると、他民族国家の差別と区別の中でここが好きという方もいるとの事だが、木もない植物の栽培も



できない荒野で、遠くの井戸に水を求めての暮らしは大変だろう。この地に強制的に移住させられた人々の辛苦が伺われ胸の詰まる思いがする。

岩場の中腹に、唯一現代を感じさせる太陽光発電が、ボツンとセットされていた。

日本では趣味の一つに、我が家を自分でリフォームするDIYが注目され紹介する事が多いのだが、ここではそんな事は日常生活で当たり前だろう。ネイティブアメリカン（インディアン）は差別用語に繋がるので、今はネイティブアメリカンと言うとの事）の住居を見学したが、もともと家は自分の手で建てるものだったのだと思い返した。今は実際には自分で建てることは難しいのだが、改装

する事は出来る。リフォームがなぜワクワクするか。生きるとあかしのような家づくりの原点にたった気がする旅であった。

（ここでは観光や飲食などで、各自の生計を立てているとの事だ。ランチは、崖の端に建つ何十年前に建てたのだろうかと思う食堂小屋で食べた。今地震が来たら終わりかしらと、耐震など気にしては入れない建物だ。中にはカウナターと年代物のビリヤード台が置いてあり、西部劇の『駅馬車』の休憩地だったような感じだ。平たい揚げパンの上に、挽肉入りのピーンズにカットレタスをのせたナバホ・タコス^①写真^②。これがとても美味しいのだが、居留地ではお酒は禁止で売っていない。



二泊この地のロッジに宿泊したのだが、砂漠で喉が渴いても、ビールなしの食事、何とも健康的な二日間を過ごしてきた。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。